

多言語多文化共生の教育実習における 非母語話者教師の意思決定

申 愛子

1. 始めに

日本語教員養成において教師の意思決定に関する研究は実習指導の基礎的研究として大切な一環である。授業における意思決定を明らかにすることは、教師が授業中何を捉え、それをどう解釈し、決定を下していくのかという授業中の認知活動の特徴づけることができる(池田 2004)。

従来の研究から分かるように、このような教師の意思決定は外的要因としての実習形態の影響を多く受ける。内田・白石(2000)では教育実習における教師の意思決定のプロセスと授業形態に対する認識との関係を示し、また、岡崎(2000)でも教育実習のあり方について問題提起をしている。特に、池田(2004b)では、実習の担当教員から個々の実習生に割り振られた担当項目を個別に指導教員の指導を受けながら教案を完成し、その教案に基づいて教壇実習をする実習形態—「分業型実習」と、実習授業のコースデザインのすべてを実習生全員で対話を通して決定し教壇実習を実施する実習形態—「協働型実習」という二つの対照的な実習プログラムに参加する実習生を対象として、その違った意思決定プロセスのパターンを明らかにした。

一方、日本社会が定住型外国人の増加に伴い、多言語多文化共生の社会に移行することによって、日本国内の日本語教育界で非母語話者教師の新しい役割や、存在価値が見られるようになった。これに関する研究(石井 1996、朱・単 2004、古市 2004)も近年少しずつ行われているが、まだ極めて少ない。

その中でも、非母語話者教師の意思決定に関する研究はまだ行われていない。非母語話者教師が授業中母語話者教師と同じような意思決定のプロセスを持っているのか、授業中非母語話者特有の内省を行なっているのかなどに関する研究はいまだに見当たらない。

2. 研究課題

そこで本研究は池田(2004)と同じく「分業型実習」と対照となった「協働型実習」に参加された非母語話者教師を研究対象者に、彼らが協働型実習形態の中でどのような意思決定を行っているかを明らかにすることを目的とする。

RQ1) 多言語多文化共生を目指した協働型実習に参加している非母語話者教師は何をキュー(きっかけ)として意思決定を行っているのか。

RQ2) 非母語話者教師が意思決定のキュー「非母語話者としての内省」を行うことによって、どのように実態を解釈し、意思決定に結び付けているのか。

3. 研究方法

3.1 調査対象

本研究の調査対象者は都内国立大学大学院の母語話者と非母語話者による教育実習の 2004 年度、2005 年度の実習に参加した非母語話者実習生 7 名。教壇実習期間は 8 日間に渡って実施される。本実習では、実習生が主体となり、協働ですべてのプログラムを作り上げるもので、授業ではメインティーチャ(MT)、アシスタントティーチャ(AT)、グループティーチャ(GT)の役割で進行するチーム・ティーチングの形態をとる。この実習の特徴としては、多言語多文化共生を目指す対話を重視した問題提起型学習であることである。

3.2 データの収集と分析

岡根・吉崎(1992)を参考に実習終了後、担当教師に対し当日中にビデオ録画された自分の授業を見ながら内省を語る再生刺激法によるプレイバックインタビューを行い、これを録音した。さらに、録音したものを文字起こしし、授業中の意思決定場面を抜き出して記述した。

意思決定要素及びプロセスの分析は池田

(2004) の分析枠組みに基づいている。

4. 結果と考察

表1 非母語話者教師の意思決定のキューの分類

本稿でのキューの分類		キューの内容
明示的なキュー	学習者の反応	学習者の反応や自発的言動などが意思決定のきっかけとなっているもの
	教師の言動	教師の言動がきっかけとなっているもの
	AT,GTの言動	AT、GTの言動が意思決定のきっかけとなっているもの、AT、GTが教師へアドバイスした時
	時間	時間が意思決定のきっかけとなっているもの
	その他	通常教授活動から予期せぬことがきっかけとなっているもの
非明示的なキュー	教師としての内省	教師の過去の経験や内省、知識に基づくもの、学習者の積極的な行動がキューとなっているのではなく、その場の状況を教師が観察し、そこで認識した事態をキューとしているもの
	非母語話者 (NNS) としての内省	非母語話者としての学習上、日本での生活上、日本人との接触上の経験や内省、知識に基づいて、その場の状況観察し、そこで認識した事態をキューとしているもの

表2 非母語話者としての内省の特徴

<参加者が問題提起する場合>	<非母語話者自身が問題提起する場合>
非母語話者という共通的な立場	非母語話者教師自身の接触経験
非母語話者参加者との同じ経験	
同じ問題を抱えている立場	

4.1 RQ1.の非母語話者教師に意思決定のキュー

本研究で見られた非母語話者教師の意思決定のキューの分類として、池田 (2004) の枠組みを参照し表1に示す。新しい要因として、非明示的なキューの「非母語話者としての内省」という要因が本研究で見られた。

これらのキューが意思決定プロセスの中で占める比率を図1に示す。

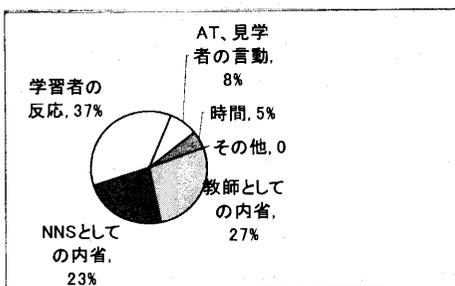


図1 意思決定のキューの占有率

池田 (2004) と同じく、非母語話者教師からも「学習者の反応」が 37%と、意思決定のキュー

として一番多く見られたのが。しかし、同時に「非母語話者としての内省」をキューとして意思決定を行ったのも 23%を占めていた。これは、非母語話者教師が「非母語話者」という経験を有効に活かして意思決定を行っているということを示唆する。

4.2 RQ2. キュー—「非母語話者としての内省」から授業実態への解釈及びその特徴

池田 (2004) の意思決定の認知プロセスモデル (図2) を基に意思決定のキュー「非母語話者としての内省」を分析した結果以下のものが見られた。

非母語話者教師は主に意思決定のプロセスの中の「ズレとその原因の認知と解釈」と「代替策の呼び出し」の段階で「非母語話者としての内省」をキューとして意思決定を行うことがわかった。これは、この二つの段階で、「非母語話者としての内省」をキューとして解釈することによって、参加者の発話の意図を容易に把握し、また豊かな代替策の選択肢を備えることを示している。

授業の予定と状況

↓

キューの観察

↓

授業計画と実態とのズレに対する認知

↓

ズレとその原因の認知と解釈

↓

代替策の呼び出し

↓

代替策の選択

図2 意思決定の認知プロセス (池田 2004)

このような役割を果たすキューとしての「非母語話者教師の内省」の特徴を表2に示す。

1) 一つの特徴として、参加者から問題提起された場合、①非母語話者という共通な立場、②非母語話者参加者との同じ経験、③同じ問題を抱えている立場という三つの違った角度から内省を行い、それをキューとして意思決定に結びつけていることが分かった。

ここでは、「非母語話者という共通な立場」を挙げて詳しく分析する。「非母語話者という共通な立場」からの内省とは、非母語話者としての普遍的な認識から、参加者の言動や心理に共感しやすく、問題を表面から深層（非母語話者参加者が言い切れなかったことなど）へと参加者を導いたり、代弁したりしようとするものである。その具体例として、以下の事例を提示する。

【事例】

授業の予定と状況

一人ひとりがこの地域社会で気持ちよく生きていくために自分に出来ることは何かについて話し合う予定で、外国人が散住することのいいところ、困るところについてさらっと、昨日の復習みたいな感じでやるつもりだった。

↓

キューの観察

集住と散住問題について参加者の皆さんからいろんな話が出て、結構時間を引っ張られた。

↓

授業計画と実態とのズレに対する認知

一人ひとりがこの地域社会で気持ちよく生きていくために自分に出来ることは何かについて時間をかけようかと思ったが、集住と散住のいい悪いところについて、話も、意見も結構出てきた。

↓

ズレとその原因の認知と解釈

集住、散住のいいところ、悪いところについていろいろ盛り上がり、話もいっぱい出ていた。出た話をそのまま流すことは出来ず、でも、その意見もざっくばらんで、全体で議論できる話題が出てこなかった。

↓

代替策の呼び出し

前日の参加者の話—お互いがいいコミュニケーションをするために、どうすればいいか—を取り出して、引き続き議論することを考えていた。特にこの話題について、もうちょっと話したい、考えたいと思っていた。(接触の中で) まず一番大事なのが、日本人は外国人にどうしてほしいか、外国人は日本人にどうしてほしいかというお互いの考えを分かり合うことである。これは誰からも教えてもらえないから、お互いの気持ちをこの場で解り合えたらいいと思っていた。(FI: この問題に関して、自分自身も外国人という立場から知っていた。自分の中ではこれですでに問題化されていた。)

↓

代替策の選択

お互いがよいコミュニケーションをするために、どうすればいいのかについて、全体で話し合うことにした。

この事例は、非母語話者教師は教師であると同時に一人の非母語話者としても、参加者から提起された話題を考えていることが分かる。日本社会に住んでいる一人の日本語非母語話者として、日本語母語話者との接触に対する戸惑いという共通認識が内省され、これが「お互いがよいコミュニケーションをするために、どうすればいいか」という話題を持ってくるキューとなり、最後の代替策の選択という意思決定に結び付けていた。

2) 「非母語話者としての内省」のもう一つの特徴は非母語話者教師が自ら問題提起する場合で、教師自身の接触経験が内省され、それを教案や授業中活

かすことである。ここで、これに対する説明は省略する。

5. まとめ

教師の意思決定は外的要因と内的要因の影響を受ける Smith (1996)。本研究でも、内的要因として非母語話者教師の「非母語話者としての内省」が意思決定に積極的な影響を及ぼしていることが明らかになった。また、池田 (2004) で実習形態の意思決定への影響が実証されているように、このような内省を活かしたのは、多言語多文化共生を目指した対話を重視する問題提起型学習の実習形態も外的要因として決定要因となると考えられる。

このように、非母語話者教師の意思決定プロセスを研究することによって、授業中の認知活動の特徴が明らかになる。これは、非母語話者教師の養成や積極的な役割を促すためにも有益な手がかりになると思われる。

参考文献

- 池田広子 (2004a) 「日本語教育実習における教師の意思決定—意思決定と授業形態の関係から—」『世界の日本語教育』第 14 号、1-20
- 池田広子 (2004b) 「多言語多文化共生を目指す教育実習における教師の意思決定—成人学習者を対象とした場合—」『言語文化と日本語教育』 27 号、182-195
- 石井恵理子 (1996) 「非母語話者教師の役割」『日本語学』Vol.15 No2、87-94
- 内田安伊子・白石知代 (2000) 「日本語教育を通して観察された教師の意思決定プロセス」『お茶の水女子大学人文科学紀要』第 53 巻、227-254
- 岡崎眸 (2002) 「多言語多文化社会を切り開く日本語教育」『内省モデルに基づく日本語教育実習理論の構築 平成 11~13 年度 科学研究費補助金研究 基盤研究 (c) (2) 研究成果報告書』 299-321
- 岡崎眸 (2002) 「内容重視の日本語教育—多言語多文化共生社会における日本語教育の視点から—」『内省モデルに基づく日本語教育実習理論の構築 平成 11~13 年度 科学研究費補助金研究 基盤研究 (c) (2) 研究成果報告書』 322-339
- 朱桂栄・単娜 (2002) 「共生言語としての日本語教室におけるインターアクションに関する考察—母語話者実習生及び非母語話者実習生の IRF モデルによる比較—」『内省モデルに基づく日本語教育実習理論の構築 平成 11~13 年度 科学研究費補助金研究 基盤研究 (c) (2) 研究成果報告書』 167-184
- 野々口ちとせ (2002) 「非母語話者実習生の自己受容—内省モデルに基づく教育実習の場合—」『内省モデルに基づく日本語教育実習理論の構築 平成 11~13 年度 科学研究費補助金研究 基盤研究 (c) (2) 研究成果報告書』 147-157
- Smith, D.B. 1996 Teacher decision making in the adult ESL classroom. In Freeman, D. and J.C. Richards (Eds.), *Teacher teaming in language teaching*, Cambridge: Cambridge University Press, 197-216

しん あいず／お茶の水女子大学大学院 言語文化専攻
Aizishen2002@yahoo.co.jp